
雨の日

K R I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日

【Nコード】

N2459I

【作者名】

K R I N

【あらすじ】

中野瀬 造 は悩みを抱えていた。

雨が降りそうな天気にかかる、造にとって忘れられない出来事……。

「いつてきまゝす。」

中野瀬 造は、いつものように玄関を出て、前庭に一步足を踏み出すと、

いつもより少し空が暗いような気がして上を見上げた。

そのまま空を見回し、西の方角を見てピタッと動きが止まる。

「雨、降りそうだな。」

造は傘を取りに家の中に戻った。

造は凡庸な高校二年生だ。勉強が特にできるわけでもなく、芸術的なことでもどこか突出しているわけでもない、ついでに、運動神経もほぼ平均値だと言っても過言ではない。

要するに、目標もなく、ただ単に高校生としてしなくてはいけないようなことをしているだけの少年だ。

「はあ。」

ただ、彼には一つだけ悩みがあった。

そのことを考えるたびにため息をしてしまうようなこと、しかし、他人から見れば少し羨ましいような悩みだった。

そんなことでも、悩むには変わりない。

進学して約半年の十月上旬、夏服から冬服に変わるに伴うように天候が変わった頃、

それが今で、この悩みの種はその半年前ほどから出現した。

ため息一回で幸せが一つ逃げていくというのなら、彼はどれほどの幸せを逃がしてしまったのだろうか。

数えても数えきれないような回数のため息の原因は、学校にいる間中嫌でも気にかかってしまうようなことなのだが、皮切りにこの登校中に出現するのだった。

登校時間は徒歩三十分、大体十五分歩いたぐらいで、

「せんぱい。」

と、足音も立てずに、気配を一切感じ取らせないように近づいてきて耳元で囁くのだった。

少女の声、まるでキャバ嬢が客に対して気を引かせるために色気を出すような口調で囁く。

それを聞いた瞬間に、造は背筋をぴんと伸ばして、ビクツ、と言う効果音が実に似合うリアクションをとる。

「せんぱい。」

ともう一度甘い、氷砂糖のように甘い声を出しながら、彼女は背後から抱きついた。

両腕でしっかりと肩を抱え、顔を覗き込むように前に出し、二人の頬がほぼ触れ合っていた。

茶髪と黒髪の間ほどの色をしたショートヘア、少しパーマがかかっているのか毛先がくるんとカールしている。

「こ、こら！だから、急に抱きつくなんて！！」

と造は叫びながら振り払おうとして体をジタバタさせるが、がっつりと抱きしめているので離れる気配もなく、少女は「きゃはは」と笑っている。遊園地のアトラクションを楽しむ感覚のようだ。

少女は無邪気で可憐な笑顔を振りまく。それとは対照的に造の顔は困っているような表情で、その様子を見ながら通過していく高校生や中学生、小学生に会社員の人やごみ出しに向かっている主婦の皆さんが通るたびに顔を赤くしていく。

「は、離れろって！！」

「へへへ、先輩ったら、顔をこんなに真っ赤にして、照・れ・屋さん」

そういつて少女は自分の頬を造の頬に強く押しあて、頬擦りをした。その横を通って行く自分と同じ制服の少年、少女と同じ制服の少女たちがクスクスと笑ってこっちを見ては、目をそらして歩いていく。

「あーもうっ！速く離れるー！！！！」

「先輩、そんなに照れるなんて……。」

少女は悲しそうな声で言って、

「可愛い？」

と、また甘ったるい声に戻して行って頬をさらに強く押しあてた。

「離れるー！ー！！！」

造は朝から叫んでいた。それが日常になりつつあるのが、彼の日常である。

少女の名前は解郡ほごしあけり 翠造すいの学校の後輩だ。

同じ学校になったのは今年からで、造が彼女の存在を知ったのは四月くらいだった。

桜が散り始めたぐらいの陽気な晴れの日、今日と同じように家を出て、翠がこれまた今日と同じように抱きついてきた。

自分は翠のことなんか一切知らなかった、顔を見たこともなかったし、同じ学校だとも知る由もなかった。

しかし、彼女は造のことを知っていた、異様なほどに。

毎日同じ所で、同じ時間に、同じように気配を絶ち、同じように背後から抱きつく。

それが彼女なりの一種の愛情表現なのだろうが、造にとっては迷惑であった。

いや、若干うれしいところもあるのだが、恥ずかしさが腹の底からこみ上げてくる、造は結構な恥ずかしがり屋なのだ。なのに翠は一切合財かまわずに自分に抱きついてきて登校中の学生や通勤中のサラリーマン達の注目を浴びてしまうのが、この上なく恥ずかしいのだ。

そこが結構、造には辛く感じてしまっただった。

「で、そういうわけで今日も教室に逃げ込んだわけだ。」

時は十二時半ちょうど、学校は昼休憩の最中だ。

今は造の日常になりつつある光景の一つとして組み込まれようとしている、昼休憩にいつも一緒に昼食をとっている親友、吉野 俊彦

に朝に起こる出来事について相談しているところだ。

そして、

「あーあーあー、モテる男は羨ましいですなあ。聞こえない聞こえない。」

そういつて吉野は弁当の唐揚げをほおばり、聞き流す。

「ちゃんと聞いてくれよ。俺だつて結構困つてんだぞ?」

「あゝ、じゃあ、明日は押し倒せ。」

吉野は急に眼の色を変えて真面目そうに言った。

「できるかあ!! つか、そんなことを神妙に言つなあ!!」

叫んで突つ込む造。

『これから、放送部の昼の放送を始めます。』

突つ込みがさく裂したと同時に放送が始まった。

「ったく。大体お前がはつきり言えば済むことだろ?」お前のごとが好きじゃない」ってさ。」

「いや、そうだけどさ、別に嫌いだつてわけでもないし、好きでもないし……それにそんなこと言つたら気にしちやいそうだし。」

「あゝ、あゝ、優柔不断だねえ。そんな男はすぐ振られるぞ……つて言つたら、なんだか悲しくなつてきたぞ……orz」

なんだか自分を自分で追い込んで急に落ち込んだ。

『では、今日は今まで言えなかったことを思いつきり言つてもらいましよう。今日のゲストは一年七組の解郡 翠さんです。では、どうぞ。』

スピーカーから聞こえてきたのはいやでも耳を疑いたくなるような名前だった。

「はい?」

『へへへ、えーと、先輩……。』

「おうおう、お前への告白か? 愛の告白か? 羞恥プレイか??」

「いや、ない! それらは無い!! つか、最後のは特にない! !!!」

造はそういつてパックのミルクティーをぐつと飲む。

手には鞆しか持つておらず、どうやら傘を忘れてしまったらしい。

「あ、先輩。」

振り返り、その顔を見ると、解郡 翠だった。

「へへへ、偶然先輩が来て良かった。このままだったらずつとあそこにいることになってたよお。」

造と翠は一緒に帰っていた。

当然、傘は一つしかないの二人は一つの傘の下で寄り添っている。「せんぱい。もっと詰めないと濡れちゃいますよお？」

翠は造の腕を両腕で掴んで自分の胸に押し当てるように体を寄せる。

「よ、寄りすぎだって。」

造の言うことはほぼ無視して顔をニヤつかせながら造の肩に頭をつける。

「ふう、まあ、仕方がないか。」

「？」

翠は頭に疑問符を浮かべる。

「先輩、今はジタバタしないの？」

翠は横から造の方を見ながら言う。造は一旦翠の方を見るが目があつたのと顔が近かったせいで顔を赤くしてすぐに前を向きなおす。

「いや、そんなことしたらどっちも濡れちゃうだろ？俺も濡れたくないし、お前を濡らしちゃったら風邪ひいちゃうかもしれないだろ？」

「先輩、そんなに濡れるって連呼されると……………」

「やめなさい、そんな変な解釈をしてしまう考えは捨ててしまいなさい。」

翠はそう言った後、すぐに前を向いた。「そっか」と呟いていたりもしていた。

「ねえ、先輩。」

「ん？」

「雨の日って好き？」

「雨の日？俺は嫌いだな。」

造はさっき言ったような理由から雨が苦手なことを翠に言った。

「それにさ、服がぬれても乾きづらいしさあ。風邪もひくしね。」

「そっか、先輩は嫌いか。」

その翠の言葉の後、二人の間に少し沈黙が流れた。

「私は……雨の日は好きだよ。」

翠はそういうと、

「例えば……」

造の腕から手を離して前方に走り出した。

「あ、どうしたんだよ！！！」

造もあわてて翠を追いかける。

「おい！！待てよ！！風邪ひくって！！！！」

造の声が届いていないかのように翠は走る。

信号が赤になっっている横断歩道の前で、翠はやっと止まった。

「急にどうしたんだよ！！？風邪ひくぞ！！！！」

翠を傘の中に入れて造は問いかける。

「こうすれば……」

「？」

「こうすれば先輩は私のことを心配してくれる。」

「え……。」

「こうすれば先輩は私のことだけを考えてくれる。雨が降ってくれば相合傘で先輩に

くつついても拒絶されない。」

確かに、造はさっきまでほとんど翠のことを考えていたし、翠のことを心配していた。

拒絶もしなかった、あくまで濡らしてしまわないように。

「先輩……。」

翠は造の正面に近づくと、ほとんどゼロ距離だ。

「私は、そんな、そんな『大好きな先輩』と一緒にいられる、そんな雨の日は好きだ。」

翠は言った。いつものような甘ったるい声ではなく、真面目そうに、真剣に造に言った。
自分の気持ちを。

はつきりと、自分の思いを伝えたい人に。

「……あ。」

造は突然の出来事に軽く戸惑っていた。でも……。

彼女ははつきりと言った。自分の気持ちを。

今まで、そんなことを感じさせるような行動をとってきたけど、それでも自分で言ったのは初めてだ。

ちゃんと自分を思ってくれる、そんな彼女が、今自分のことを見つめている。

いつものようなニヤケ面じゃなく、結果が怖いのか、不安そうに造のことを見つめている。

そんな顔をしているけど、いつもは自分のことを想ってくれている。

「なあ、解郡、俺は……。」

雨の日は嫌いだ。

でも、こいつと一緒になら、

翠と、一緒に過ごせるのなら、

好きになれそうだ。

(後書き)

こんな感じですよ。

やっぱりしまりが甘いですかね？

もし、心に残るようでしたら、感想をお願いします。

未熟な点も指摘していただけたら幸いです。

最後に、ここまで読んでいただきありがとうございますございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459i/>

雨の日

2010年12月21日03時02分発行